大学編㊴ 最新事情

先輩から後輩へ受け継がれる、日大文理学部独自の就職活動支援

日本大学文理学部

（東京都世田谷区）

日本大学文理学部は、日本大学に14ある学部のうちの一つだ。同学部の昨年度の就職率は97％。民間企業を目指す学生もいれば、公務員を目指す学生もいる。進路先は業種・業界さまざま。学生が就職活動をする際、力強い味方として頼りになるのが就職指導課だ。同課では年間100を超える就職支援行事を展開したり、各種検定や資格講座も開講している。文理学部の就職支援についてお話を伺った。

桜上水にある日本大学文理学部。
（上）就職指導課が入る1号館。
（左）文理学部の校舎前にある桜並木。
近隣住民の散歩コースにもなっている

文理学部の学生のための就職支援行事を展開

日本大学文理学部は、人文系・社会系・理学系の3系統合わせて18学科あり、あらゆる学問領域に対応している。学生数は、大学院生合わせて約9000人。その学生たちの就職活動を支援しているのが、就職指導課だ。

1号館2階にある就職指導課には、新年度が始まった4月中旬にもかかわらず、学生の姿が多かった。

「就職支援行事の申し込み、エントリーシートの添削など、ひっきりなしに学生が訪れます。先輩の就職活動体験記などの資料を閲覧したり、就職活動に関する相談をするなど、3～4月は学生でにぎわっています」と語るのは、就職指導課の小塚敏久課長だ。小塚課長は同課の就職支援の特長を聞かせてくれた。

「当課では、年間約100以上の就職支援行事を実施しています。年間スケジュールを組むときは約80～90なのですが、学生の様子や就職状況などを考慮し、『今年の学生には、こういう講座が必要なのではないか』『ここをもっと強化すべき』といった意見を出し合いながら随時、行事を追加しています。

毎年、同じ行事を繰り返すだけでは意味がないということです。年によって学生のカラーや社会情勢は異なります。それに合わせて、行事の時期や内容を変えていきます。時代の流れに合わせるためにも、行事の見直しは重要です」。

昨年度は秋に実施した行事を今年度は春に時期を早めて実施したり、内容はもちろん開催場所にも配慮し、常にテコ入れを意識している。

「数ある行事の中でも評判なのが、『就職活動再現講座』『文理学部OB・OG懇談会』『優良企業合同研究会』の三つです。OB・OG懇談会は、一昨年大教室で実施したのですが、質問をする学生と、質問をされるOB・OGの距離が、教壇に立つ教師と学生のような関係になっ

てしまい、どうもぎこちない。これでは聞きたいことが聞きづらいし、本音で話すことができないと思い、昨年は茶話会形式にしました。お茶を飲みながらOB・OGと接することで、就職活動や働くことについて、学生は質問しやすくなったようです。とてもよい雰囲気でした」と小塚課長は思い返す。

4年生が演劇風に就職活動を振り返る「就職活動再現講座」も面白い。内定をもらった4年生が就職活動の流れを演じる。企業の説明会、グループ面接、役員面接など、さまざまな場面において見本となるよい学生ばかりではなく、駄目な学生も演じてもらい、何が駄目で、どこをどう直したらよいかを3年生に考えさせる。

（右から）就職指導課の小塚敏久課長と，課長補佐の井坂弥生氏

「ここがポイント」「こういう態度は感じが悪い」「ここでミスはするなよ」というように、最近まで実際に就職活動をしていた先輩からアドバイスがもらえる。これほど貴重なことはないだろう。

「そこが、当課の行事の特長でもあり強みです。同じ学部の先輩やOB・OGが、労力を惜しまず協力してくれる。OB・OGは就職支援行事のために、北海道や九州といった遠方からわざわざ足を運んでくれます。『本当にありがとう』と感謝の気持ちを伝えると、『先輩に同じことをしてもらったから、私たちも後輩のためになることがしたいんです。こちらこそ、声を掛けていただきありがとうございます』と笑顔で答えてくれる。内定をもらって少し落ち着きたい4年生も、後輩のために一肌脱いでくれる。卒業生、先輩の存在があるからこそ、日本大学文理学部の就職支援は成り立っているといっても過言ではありません」（小塚課長）。

OB・OG、先輩の協力が在校生の就職活動を支える

行事以外にも、興味深い取り組みはまだある。文理学部の内定者や卒業生にインタビューを行い課員が編集した『ジョブガイド』は、3年生全員に配られる冊子で、「就職活動の流れがよく分かり、イメージしやすい」と好評だ。

同課課長補佐の井坂弥生氏はこう話す。

「私たち課員も、新しい情報を集め、文理学部の学生に合った情報を提供できるように努力しなければなりません。卒業生、OB・OGの力は本当に偉大です。彼らの行動力や社会人として成長している姿を見ると、こちらも刺激されます。もちろん彼らだけの力に頼ることなく、大学側のサポート体制も万全です。本学部では、各学科に担任とは別に、就職担当の教員を置いています。就職活動全般に関して相談できる存在で、学生の力強い味方です」。

学部全体で学生の就職を支援する取り組みを聞いて、温かみを感じた。一人では不安になる就職活動が、この学部でならやり通せると感じる学生は多いはずだ。

「どの学生も不安を抱えています。『ちゃんと内定がもらえるか?』『エントリーシートがうまく書けない』『面接試験は緊張する』……等々。皆が同じ気持ちを持っているのです。それを知り、サポートしてくれる人が大勢いるということを理解した上で、就職活動に臨んでもらいたいと思います」（井坂氏）。

同学部の平成28年度の就職率は97%。就職先一覧には大企業の名がずらりと並び、就職支援の手厚さと成果がよく分かる。公務員や教職に就く学生も多い。井坂氏はこう説明する。

「教員養成や、公務員志望者のサポートにも力を入れています。学生が希望する将来を手に入れることができるよう、教員採用試験対策講座や公務員採用試験対策講座を実施するなど、さまざまに展開しています」。

最新事情㊴……日本大学文理学部

秘書検定文部科学大臣賞の受賞は、学生の努力の証し！

同課の就職支援行事には、各種検定や資格試験の講座が組み込まれている。各学科の学びに合った検定や資格の他に、ニュース時事能力検定、日本語検定、世界遺産検定などもある。「秘書技能検定講座」もその一つで、準1級と2級の内容を同時に学ぶことができる。

「準1級と2級の内容はリンクする部分が多いので、準1級を受験する学生も、2級を受験する学生も同じ内容を学んでいます。外部に委託している講師に、秘書検定の内容をしっかり押さえながら、学生が自ら考える力が付くように指導をしていただいています。学生の出席率もよく、指導の成果も出ています。平成28年度は初めて文部科学大臣賞を頂くことができました。学生の努力もありますね。驚きました」と小塚氏の表情は明るい。

受講対象者は全学年だが、やはり就職活動を控えた3年生が多いそうだ。3年生のときに受講して秘書検定に合格した3名の学生に話を聞いた。国文学科4年生の吉本静香さんは準1級に合格した。

「多くの先輩が秘書検定を受験していて、就職活動に生かせるのではないかと思い受験しました。社会人としての立ち居振る舞い、マナーや言葉遣いが身に付いたと思います。お辞儀の角度や言葉の発音の仕方、テキパキとした動作に笑顔が加わることで、より魅力的な人物になると思います。準1級は筆記試験と面接試験があるので、面接での対応力が確実に付きます。秘書検定に興味がある後輩には、準1級をお勧めしたいです」と語ってくれた。

同じく準1級の合格者で、社会学科4年生の鈴木彩子さんはこう振り返る。

「秘書検定を学ぶことで、実生活に生かせる力が習得できると思い受験しました。その狙い通り、相手の立場に立って考え行動する力と、先を見通して行動する力が付いたと感じています。現在、就職活動の真っ最中で、面接試験の場面で生かしています。自然な姿勢や話す際の間の取り方、感じのよい表情、視線の向け方などに注意しました。実際に面接試験で企業の方に、『明るくて感じがいいね』と褒めていただけたことがあり、自信につながっています。将来、就職先でも学んだことを生かして活躍したいです」。

男子学生の挑戦もここ数年増えている。社会学科4年生の伊藤健太さんは2級に合格した。

「敬語やビジネスマナーが学べる検定であると知り、受験しました。言葉遣いや話の仕方、聞き方も学べたので、就職活動の面接試験において自信を持って臨むことができると思います。秘書検定の内容は、秘書に限らず全ての社会人に必要な知識だと思うので、さまざまな場面で生かしていけそうです」と胸を張る。

どの学生も自信を付けて、就職活動に臨んでいるようだ。

「資格や検定に合格することは、学生にとって大きな意味があります。自信を持って就職活動に臨める。能力の証明にもなる。挑戦したこともプラスになります。『こういう力がないから、勉強して力を付ける』。この気概は自分のPRになります。そのために就職指導課は行事を企画し、講座を設定します。学生が必要だと思ったら、それらの行事や講座を利用するでしょう。『参加しなさい』ではなく、学生には自ら考えて行動してほしいのです。『おかげさまで内定が出ました。ありがとうございます』と全ての学生から聞けるよう、今後も文理学部ならではの就職支援を展開していきます」（小塚課長）。

社会学科4年生の伊藤健太さん

国文学科4年生の吉本静香さん

社会学科4年生の鈴木彩子さん